

スペンサーの『羊飼いの暦』

海老澤 豊

十八世紀初頭の英国において、ウェルギリウスを模範とする古典牧歌の信奉者ポープと、スペンサーに倣った英国風牧歌を唱導するフィリップスの間で、牧歌に関する激しい論争が巻き起こった。これはティッケルが『ガーディアン』誌上で、同じホイッグ派のフィリップスの牧歌を褒め、トーリー派のポープの牧歌を完全に無視したことが原因である。ポープは同誌でフィリップスの牧歌を賞賛するふりをしながら、フィリップスがスペンサーから借用した文体や表現を大いに揶揄した。だがポープが苛立ったもうひとつの理由は、ティッケルがフィリップスこそスペンサーの正統な後継者なりと主張したことであった。ポープの「牧歌論」を読めば、彼自身もスペンサーの牧歌を高く評価していたことは明白である。スペンサーの牧歌は牧歌論争における重要な論点のひとつなのである。本論ではスペンサーの牧歌集を概観した後に、十八世紀におけるスペンサーの受容について考察する。(1)

エドモンド・スペンサー(Edmund Spenser, 1552?-99)の『羊飼いの暦』(*The Shepherdes Calender*, 1579)には、十二の月を題名とする十二篇の牧歌が収められており、全体的にかなり複雑な構成を取っている。(2)表紙にはフィリップ・シドニーに宛てた献辞が掲げられているが、作者の名はどこにも見当たらず、巻頭詩の最後に「ふさわしくない者」(Immerito)という署名があるにすぎない。続いてE・Kなる人物による「ハーヴェイへの手紙」と「全巻の梗概」が置かれている。それぞれの牧歌の前には作品の内容を要約する木版画と「梗概」が、また後には羊飼いの「寓意」とE・Kによる「注釈」が配され、十二行の小詩が全巻を締めくくる。E・Kの正体についてはさまざまな議論があるが、本論ではモデル探しには立ち入らない。(3)

E・Kは「ハーヴェイへの手紙」で、雄弁家で詩人のゲイブリエル・ハーヴェイに「新しい詩人」スペンサーを推薦し、『羊飼いの暦』の文体、原典、主題について擁護している。まず文体について『羊飼いの暦』は「少々難解で、多くの人々が使わない」英語で書かれているが、これは「羊飼いたちの田舎じみた粗野ぶり」を表わすために、チョーサーを始めとする昔の詩人から「ごつごつした響き」や「田舎の人々に最も使われている古く廃れた言葉」を借用したからだという。スペンサーは作品に古い語彙や綴りを用いるのが常であったが、『羊飼いの暦』の文体については当初から批判の声が上がっ

た。『羊飼いの暦』を献呈されたシドニーは『詩の弁護』でスペンサーの牧歌集には「詩情が満ちている」としながらも、テオクリトス、ウェルギリウス、サンナザロのいずれもが用いなかった「古い田舎風の言葉で構成された文体」は認められないと断じる。またベン・ジョンソンもスペンサーが古代人を気取るあまりに「ありえない言語で書いた」と評している。(4)

次にE・Kが指摘するのは『羊飼いの暦』の原典となった作品で、スペンサーはテオクリトスやウェルギリウスの異教的な古典牧歌のみならず、ペトラルカ、ボッカチオ、マンチュアヌス、サンナザロ、クレマン・マロなど、イタリアやフランスのキリスト教的な牧歌詩人に多くを学んだという。母国語(俗語)を用いたマロを除けば、イタリアの詩人たちが牧歌を書くために選んだ言語はラテン語である。ペトラルカの『牧歌集』(1357)に収められた寓意的な牧歌は、腐敗した教会や聖職者への批判にあふれている。この新たな牧歌の流れはボッカチオの『牧歌集』(1370)を経て、カルメル派の修道士バプティスタ・スパニョーリ(通称マンチュアヌス)の『牧歌集』(1498)で頂点に達した。彼は第二のウェルギリウスと呼ばれ、その牧歌は十六世紀にラテン語の教科書としてヨーロッパ中で広く使われたという。またサンナザロは羊飼いの代わりに漁師を歌い手にしたラテン語の牧歌集『漁夫牧歌』(1526)で知られる。(5)

ルイスはスペンサー以前の牧歌を、繊細で理想化されたアルカディア風牧歌と、荒削りで現実的、難解な語彙に満ちて諷刺的なマンチュアヌス風牧歌に分類し、スペンサーの「一月」「四月」「六月」「十月」「十一月」「十二月」は前者に、「二月」「三月」「五月」「七月」「九月」は後者に属し、「八月」には両方の要素が混在すると説く。(6)ただしスペンサーの牧歌は英国の野山を舞台にしており、アルカディアのように理想化された風景はほとんど見受けられない。登場する羊飼いや自らの不遇を嘆くことが多く、黄金時代の至福を享受している者はほとんどいない。むしろマンチュアヌスやその翻案であるパークレイの牧歌に倣った現実的な諷刺が目立ち、一般に連想される牧歌的な世界とは一線を画している。(7)

最後に『羊飼いの暦』全巻の目的としてE・Kが指摘するのは、愛の迷宮に迷い込んだ詩人が自らの恋の炎を鎮め、若者たちに不幸な愚行を戒めることだという。だがE・Kは作者自身が隠そうとしているので、この点について多くを語るまいが、自分は「詩人の考えや隠された意味」を知っているので、語釈と合わせて注解で示唆すると述べている。E・Kのもったいぶった口調には理由がある。『羊飼いの暦』が出版された一五七九年当時、エリザベス女王とフランスのアランソン公爵の間に結婚の話が持ち上がり、国教会の礎を固めつつあった英国が再びカトリックに戻る可能性が危惧された。プロテ

スタントの貴族や僧侶はこの結婚に異議を唱え、スペンサーもカトリック勢力の再興を憂えたひとりであった。このような事態を背景にして、『羊飼いの暦』にはエリザベスを処女王として讃え、カトリック聖職者の悪徳を難じる詩行が散見されることになった。(8)

また牧歌は単純な詩形で書かれるのが通例だが、スペンサーは牧歌の内容に合わせて、スタンザ形式やカプレット形式など多彩な詩形や韻律を試しており、他の牧歌集には見られないほど実験的である。ひとつの牧歌の中で複数の韻律を用いている例もあり、たとえば「四月」で対話の部分は四行連(10a10b10a10b)だが、後半のイライザ賛歌は10a4b10a4b5c5c8c という複雑な詩形で書かれている。このような詩形の多様性については、すでに一五八六年にウェッブが『羊飼いの暦』には「長さも脚韻も異なる十二か十三のさまざまな種類の詩形」が認められると指摘している。(9) 『羊飼いの暦』がスペンサーの野心作であることは間違いない。

(1) コリン・クラウトの嘆き

「全巻の梗概」でE・Kは十二篇の牧歌を三つの系列、すなわち「嘆き」(一月、六月、十一月、十二月)、恋愛や特定の人物への賞賛を含む「気晴らし」(三月、四月、八月)、諷刺色の強い「道徳的なもの」(二月、五月、七月、九月、十月)に分類している。このうち「嘆き」に分類された四篇では、『羊飼いの暦』全体の主人公コリン・クラウトが歌い手となって、ロザリンドへの報われぬ恋の苦しみを嘆く。また「四月」ではイライザ(エリザベス女王)を讃えるためにコリンが作った歌をホビノルが紹介し、同様に「八月」では失恋の悲しみを主題にしたコリンの歌をカディが歌う。E・Kは「一月」の注釈で、コリン・クラウトという名はスケルトンの詩に見られるが、ウェルギリウスがティテュルスとして『牧歌』に登場したのと同様に、クレマン・マロは自分の分身たる羊飼いにコラン(コリン)と名づけたと記している。つまりコリン・クラウトはスペンサーの牧歌的なペルソナであり、『コリン・クラウト故郷に帰る』(*Colin Clovts Come Home Againe*, 1595)や『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590-1609)第六巻にも登場する。ここではコリンに関わる牧歌のうち、「一月」「四月」「六月」「十一月」「十二月」を取り上げる。

「一月」の主題は失恋の嘆きである。コリンは「隣町」(the neighbour towne, l. 50)でロザリンドという名の娘を見初めたが、彼女は彼の田舎じみた歌を嘲笑するばかりで、少しも顧みてはくれない。E・Kによれば、ロザリンドはスペンサーが愛する女性(正

体は不明)の名をアナグラムにしたものだが、『羊飼いの暦』に彼女が姿を現わすことではなく、コリンや他の羊飼いによって消息が語られるにすぎない。またムーアが指摘するように、恋の嘆きを主題にした伝統的な牧歌では、羊飼いは愛する女性に憐れみをかけてくれと願うのが通例だが、コリンは愛の神々や羊飼いの神パーンに愛の成就を祈願するだけで、ロザリンド本人に歌いかけることは一度もない。(10) ロザリンドは間接的かつ抽象的にしか描かれないという点において、牧歌の登場人物としてきわめて特異な存在である。

「一月」でコリンは「冬の猛威が荒廃させた不毛の大地よ、汝こそ私の苦境を映す鏡に他ならぬ」(Thou barrein ground, whome winters wrath hath wasted, / Art made a myrrhour, to behold my plight, ll. 19-20)と、自らの失意を冬の寂れた風景になぞらえる。ただし冒頭には、コリンが「うらかな日」(a sunneshine day, l. 3)に囲いに閉じ込めていた羊たちを丘に連れて行って草を食ませるという件がある。コリンが歌うのは必ずしも実景ではなく、彼の心を反映した寓意的な風景に他ならない。『羊飼いの暦』の舞台は常春の楽園ではなく、題名に示されているように円環的な時の推移に影響を受ける世界である。しかし自然のサイクル(四季)と人間のサイクル(人生)が一致することはない。季節が春の兆しを見せ始めたとしても、コリンの心は常に冬のままであり、「一月」と密接な関係にある「十二月」はコリンの死を暗示して終わる。

失恋の痛手のために自暴自棄となったコリンは「嘆きに私はやつれ、お前たちはやつれて嘆く」(With mourning pyne I, you with pyning mourne, l. 48)と羊にも自らの心境を投影する。だが羊が痩せ衰えた本当の原因は、なすべき仕事を全うしないコリンの怠慢にある。実らぬ恋に悩むあまりに羊の世話をおろそかにするのは牧歌の慣習的なモチーフである。E・Kは「梗概」でロザリンドを「田舎娘」(a countrie lasse)と呼んでいるが、コリンは「隣町」で出会った彼女に恋するあまりに、田園の仕事が手につかなくなるのであるから、彼女は牧歌的世界に敵対する存在であるとも考えられる。

一方羊飼いのホビノルはコリンに子山羊や木の実など牧歌的な贈り物をするが、ロザリンドへの恋に囚われた若者は「愚かなホビノル、君の贈物は役に立たぬ。コリンはそのままロザリンドにやるのだから」(Ah foolish Hobbino!, thy gyfts bene vayne: / Colin them giues to Rosalind againe, ll. 59-60)と相手にしない。男色はテオクリトスの牧歌では普通に見られる要素であるが、E・Kは「注釈」でコリンとホビノルの関係が男色ではなく精神的なものであると断っている。コリンは「隣町」で見初めたロザリンドに恋し、田園の仲間であるホビノルの好意を無視することによって、牧歌的な世界から乖離しようとしている。

コリンは愛するロザリンドの心を動かさず、自らの心痛をも癒せない詩歌に見切りをつけると、「麦笛」(oaten pype, l. 72)を折って地面に倒れ伏す。『羊飼いの唇』の冒頭を飾る「一月」で、牧歌の伝統的な象徴である「麦笛」を折るという展開には驚かされる。ホフマンはこの行為がコリンの絶望を劇的に表現したもので、過激ではあるが牧歌の慣習の枠内に留まっていると主張する。またルボルスキーは各牧歌に付けられた木版画の分析を通して、折れた笛が描かれた「一月」「六月」「十二月」はいずれもロザリンドへの失意を歌っていると指摘する。さらにウォーカーはロザリンドがコリンの歌を拒絶したことによって、テオクリトスの第十一歌に見られる「詩歌を通じて恋の癒しを得る」という主題は否定され、代わりに「癒すことのできない恋」というペトラルカ的な主題が浮かび上がると説く。(11) いずれにせよ、コリンはつれないロザリンドに恋したために、羊飼いとしての仕事を忘れ、詩人としての役割も放棄してしまう。

テオクリトスの第十一歌では、海の精霊ガラテアの愛を得られない単眼巨人ポリュペモスが、恋の苦しみを歌うことによって自らを癒す。またウェルギリウスの第二牧歌では、美青年アレクシスに拒絶されたコリュドンが、悩みぬいた末に「別のアレクシス」を探そうと決意して精神的な危機を脱する。しかしコリンはロザリンドへの愛に苦しみ続けるばかりで、彼が癒される機会は永遠に訪れない。「一月」につけられたコリンの「寓意」は「まだ望みあり」であり、E・Kも「コリンは激情と望みなき愛にもかかわらず、希望によりかかって幾許かの慰めを得た」と記しているが、「希望」が何を指すのかはまったく不明である。スペンサーは最後のスタンザで牧歌の慣習にしたがって、夕闇が迫る頃に「物思いに耽る少年」(the pensife boy, l. 76)が羊の群れを家路に駆り立てると、うな垂れる羊たちは主人の悩みに泣いているように見えたと描く。この結末からはコリンの失意しか感じられない。

「四月」は二人の羊飼いホビノルとセノットの対話を外枠にして、コリンが昔作ったイライザ(エリザベス女王)賛歌をホビノルが歌うという構造を取る。コリンがイライザを賛美したように、ホビノルもコリンの歌を歌うことで彼を讃えるのである。冒頭で悲嘆にくれるホビノルに対して、セノットは狼が子羊を引き裂いたのか、バグパイプが壊れたのか、愛する娘に捨てられたのかと理由を尋ねる。これらの問いはホビノルが田園の住人であることを示しているが、彼は嘆きの原因はコリンにあり、「今や美しいロザリンドが彼の傷を育み、今や彼の友は他人に変わってしまった」(So now fayre *Rosalind* hath bredde hys smart, / So now his frend is chaunged for a frenne, ll. 27-8)と答える。この二行を読めば、E・Kは否定するが、ホビノルがコリンに対して

友情を超えた感情を抱き、ロザリンドに嫉妬しているという印象は否めない。

かつてコリンの笛は仲間たちを陽気にし、彼の歌は万人を凌いだものだとホビノルが回顧すると、セノットはぜひそれを聞かせてくれと頼む。かくしてホビノルはコリンが流れ落ちる泉水の音に合わせて作ったというイライザ讃歌を歌い出す。貴人を褒め称える牧歌の例としては、プトレマイオス二世を賞賛するテオクリトスの第十七歌や、幼子の誕生によって黄金時代が復活することを寿ぐウェルギリウスの第四牧歌などがある。特に後者はスペンサーに影響を及ぼしたものと考えられ、コリンも「四月」でイライザを神々に等しい存在として歌い上げる。

イライザは「穢れを知らぬシュリンクスの娘、羊飼いの神パーンが彼女の父」(*Syrinx daughter without spotte, / Which Pan the shepherds God of her begot, ll. 50-1*)という血統に生まれた「処女王」(*a mayden Queene, l. 57*)である。オウィディウスの『変身物語』によれば、シュリンクスはパーンの凌辱から逃れるために葦に変身し、彼女をいとおしむ牧神は数本の葦を蠟でつないで笛を作る。(12) したがってパーンとシュリンクスの間に子供が生まれることは本来ありえない。ただしパーンの吹き鳴らす葦笛の音が牧歌の原型になったわけであるから、二人の象徴的な娘であるイライザが「羊飼いの女王」(*Queene of shepherdes all, l. 34*)となり、さらに牧歌そのものを表わすと考える論者も少なくない。(13)

太陽と月はイライザの放つ光輝を目にして恥じらい、詩神たちは月桂樹(栄誉や勝利の象徴)を、水の精たちはオリーブ(平和の象徴)を彼女にもたらし、三美神は彼女を四人目として迎え入れる。また彼女の頬で赤薔薇(ランカスター家)と白薔薇(ヨーク家)が混じりあうという表現は、彼女の美しさを讃えることに加えて、長年にわたる両家の不和を婚姻によって収めたヘンリー七世(エリザベスの祖父)を想起させる。このようにスペンサーは異教の神話や政治的な修辭で彩りながら、牧歌的世界の女王たるイライザと、英国君主としてのエリザベスを重ね合わせる。「僕は彼女の若き羊飼いの、たとえ疲れ果て汗まみれでも」(*And I her shepherds swayne, / Albee forswonck and forswatt I am, ll. 98-9*)というイライザに対するコリンの忠誠は、エリザベスに対するスペンサーの忠誠の誓いに他ならない。

ところで「四月」で他に注目すべきは、イライザを讃えるために羊飼いの娘たちが摘み集める花々の描写である。その一部を紹介すると、「ナデシコと真紅のオダマキ、ニオイアラセイトウ」(*the Pincke and purple Cullambine, / With Gelliflowres, ll. 136-7*)や「水仙、カウスリップ、キンポウゲ、愛すべき百合」(*Daffadownillies, / And Cowslips, and Kingcups, and loued Lillies, ll. 140-1*)など英国産の植物ばかりである。これは『羊

飼いの暦』が、テオクリトスやウエルギリウスなどイタリアを舞台にした古典牧歌の枠組や表現を模倣しながらも、英国の田園や羊飼いを描いた牧歌集であることの証である。牧歌に英国の動植物を取り入れる趣向は、十八世紀初頭のフィリップスの『牧歌集』に受け継がれるが、フィリップスがスペンサー流の古語じみた綴りを採用したこともあって、ポープやゲイからこの点を揶揄されることになる。

「四月」の最後は対話に戻り、イライザ賛歌を聞いたセノットは「愚かな少年だ、愛にかき乱されるとは」(Ah foolish boy, that is with loue yblent, l. 155)と嘆息し、コリンが恋のために豊かな才能を放棄したことを惜しむ。一方のホビノルも「手に入らない相手を愛するとは」(That loues the thing, he cannot purchase, l. 159)実に愚かだと応じる。この発言にはコリンに対する同情だけではなく、コリンに好意を抱く自らの不遇を憐れむ気持ちも含まれていよう。イライザ賛歌はコリンの優れた詩才を証明しているが、それはすでに失われてしまったものであり、彼の住む世界に黄金時代が復活することはもはやありえないのである。

「六月」はコリンとホビノルの歌合戦という形式を取る。コリンはロザリンドが別の羊飼いまナルカスになびいたことを語るが、彼女への未練を断ち切ることができずに苦しみ、一方で幸福な牧歌的世界に安住するホビノルはコリンを慰めようとする。バーナードが指摘するように、コリンが「幸福なホビノルよ、君の境遇を祝福しよう」(happy *Hobbinoll*, I blesse thy state, l. 9)と呼びかけるのに対して、ホビノルは「悩み多きコリンよ、君の苦境を嘆こう」(carefull *Colin*, I lament thy case, l. 113)と言うなど、二人の置かれた立場はきわめて対照的である。(14) 原典となったウエルギリウスの第一牧歌では、田園で悠々自適の生活を送る老人ティテュルスが、退役軍人を定住させる政策のために農地を没収されて、異国を放浪せざるをえないメリボエウスをしばし慰める。メリボエウスの災難は政治的な理由によるものであり、コリンの苦悩はロザリンドに対する失恋が原因になっているが、ティテュルスやホビノルが享受する豊かな田園生活を失ったという点は両者に共通する。

冒頭でホビノルは「無常な運命や怒れる神々に追い立てられる不幸な男」(vnhappy man, whom cruell fate, / And angry Gods pursue, ll. 14-5)と自嘲するコリンに向かって、自分が住む「谷間」(the dales, l. 21)に来るように誘う。

The simple ayre, the gentle warbling wynde,
So calme, so coole, as no where else I fynde:

The grassye ground with dainty Daysies dight,
The Bramble bush, where Byrds of euery kynde
To the waters fall their tunes attemper right. (ll. 4-8)

澄み切った空気に、優しくそよぐ微風、
他所では見つけられぬほど静かで涼しい。
草深い大地は可愛い三色スマイレで飾られ、
木苺の茂みでは、あらゆる種類の鳥たちが
滝の音に合わせて歌声を調整している。

コリンがいみじくも「アダムの失った楽園」(Paradise...whych *Adam Lost*, l. 10)と表現するように、この「谷間」は調和した穏やかな自然に包まれており、至る所に豊かな羊飼いや肥えた羊が見られ、また妖精や美神、詩神やパーンが音楽に合わせて踊る理想的な牧歌世界である。ここでエデンの園とギリシア風の理想郷が重ね合わされていることに注意したい。これに対してコリンが住む「丘」(those *hilles*, l. 19)は、ホフマンが「邪悪や原初的な恐怖に満ちたハロウィーンの悪夢」と表現するように、身を寄せる樹木もなく、ピッチよりも黒い夜鳥が巣を作り、人を惑わせる亡霊や恐ろしいフクロウが跋扈する不吉な場所である。(15)「谷間」と「丘」の対比は「七月」でも異なる文脈で描かれるが、何であれ楽園を失ったコリンが行き着いた「丘」は、ホビノルが「君を惑わせる場所」(the *soyle*, that so doth thee bewitch, l. 18)と言うように、コリンの不安定な精神を映し出している。

コリンは悩みもなかった若い頃は、仲間たちと享楽に興じ、愛を歌って笛を奏でたこともあったが、成年に達し、またロザリンドを失った今となっては「そんな退屈で気まぐれな戯事」(Those *weary wanton toys*, l. 48)には興味がないと告白する。コリンは「一月」で自らの不遇を冬の寂れた風景になぞらえ、失意のために笛を折ったが、「六月」で彼の絶望はさらに深まっており、美しい自然や愉悦に満ちた牧歌世界から自らを疎外している。ホビノルがコリンの奏でる葦笛は鳥や詩神を押し黙らせるほどであったと述べて、オルフェウスにも比類できるコリンのかつての技量を讃えても、コリンは自分の演奏を「粗雑で粗末な出来」(rough, and rudely drest, l. 77)だと卑下し、パルナッソス山に挑もうと望んだこともなく、自らの悲しみを歌うことで十分なだと相手にしない。

続いてコリンは「羊飼いの神ティテュルス」(The God of shepherds *Tityrus*, l. 81)

の死を嘆く。ティテュルスはウェルギリウスが自分の牧歌的分身に与えた名だが、E・Kはチャーサーを指すと注を施している。ティテュルスは生前に恋の虜となったが、自分の苦悩を巧みに歌って恋の炎を鎮め、羊が草を食む間に羊飼いたちが眠らないように陽気な話を披露した詩歌の達人であった。コリンは自分も彼のような技量を持ち合わせていれば、森に自らの苦悩を嘆く術を学ばせ、またメナルカスになびいたロザリンドの胸を非難の針で刺す歌を作れるのだがと嘆息する。カレンやハーマンが指摘するように、両者の間に大きな相違があることは明白である。(16) ティテュルスは詩歌によって自分の恋情を鎮めると同時に、人々を愉ませるなど詩人として公私双方の役割を果たすことができた。一方コリンが詩歌で為そうとするのは、自らの激しい情念を自然に押しつけ、メナルカスやロザリンドに復讐することに他ならない。

だが結局のところ、コリンは悩みを解消する術を何ら見つけられないまま、丘や谷間で羊に草を食ませる羊飼いに自分の嘆きを訴えることしかできない。ロザリンドの心を勝ち得ようとするコリンの想いは、ここで完全に断ち切れ、寓意にも「もはや望みは絶えた」とある。このように「六月」は幸運に恵まれて初夏の自然を満喫するホビノルト、愛を失って悲痛な境遇に陥ったコリンを対比している。

「十一月」の中核となるのは、コリンがセノットの求めに応じて、溺死した貴婦人ダイドを悼むパストラル・エレジーである。ロザリンド同様にダイドの正体も明らかにされないが、『アエネーイス』に登場するカルタゴの女王ダイドの別名エリッサからの連想で、コリンが「四月」で讃えたイライザ（エリザベス女王）と同一人物であると見なされることが多い。前述したように、カトリック教徒のアランソン公爵と結婚することは、プロテスタントのエリザベス女王にとって死に等しいと考えられたのである。E・Kは「十一月」の原典として、フランス王妃ルイーズの死を哀悼するクレマン・マロのエレジーをあげており、またダプニスの死を主題にしたウェルギリウスの第五牧歌の影響も認められる。(17)

冒頭で老いた羊飼いセノットは、恋の痛手のためにコリンの詩神が眠ってしまったことを惜しみ、恋の唄かパーン讃歌を歌うように求める。だがコリンは「この陰鬱な季節は物悲しさを求める」(Thilke sollein season sadder plight doth aske, l. 17)ので、若かりし夏の日につけていた歓楽の仮面を、現在の嘆きに満ちた自分の詩神は好まないと答える。そこでセノットは、コリンが偉大な羊飼いの娘ダイドを悼む哀歌を、ロザリンドを嘆く歌のように見事に歌えれば、子羊を褒美にやろうと持ちかける。結局コリンは「セノット、君が誘うので、それを選ぼう」(Thenot to that I choose, thou doest me

tempt, l. 49)と申し出を受け入れることになる。これはピグマンが指摘するように、マロのエレジーの一節「君は僕の望んでいることを求める」(Tu me requiers de ce, dont j'ay envie, l. 49)の模倣である。コリンがダイドーを悼む歌を選択した理由について、自分の悲しみを投影するのに便利な主題であったからにすぎないというサックスの意見や、コリンがダイドーの死に対して個人的な悲しみを表明していないとするウィップの主張も一概には否定できない。だがコリンがダイドーの死を歌うのは、季節が物悲しい冬であることに加えて、彼の人生もまた冬の段階に入ったために、このエレジーに自らの死を重ね合わせているというカレンの指摘は傾聴に値する。(18)

ダイドー哀歌は6a5b5a5b5b4c4c2d5b2d という複雑な韻律構造のスタンザ十五連から構成され、実質的にオードとみなしても差し支えない。第一連から第十一連までは「心の重い葬礼よ」(O heauie herse)および「心痛に満ちた歌よ」(O carefull verse)というリフレインが繰り返されるが、第十二連以降は「幸福な葬礼よ」(O happye herse)および「喜びの歌よ」(O ioyfull verse)というリフレインに変わる。死者への哀悼から転じて天上における幸福を寿ぐのは、ウェルギリウスやマロにも共通するパストラル・エレジーの常道であり、セノットがコリンの哀歌には「悲しみに満ちた喜び」(With doolful pleasaunce, l. 204)が込められていると感想を漏らす理由もそこにある。

哀歌の前半でコリンはダイドーのさまざまな美德を称え、彼女の死によって自然も様相を変えてしまったと歌う。太陽は翳り、野原の緑も褪せ、羊たちは草を食まず、森の獣も狂ったように嘆く。かつてダイドーのために水の精たちはオリーブ(平和)を、また詩神たちは月桂樹(栄誉や勝利)を持ってきたが、今や彼女たちが墓前に捧げるのは不吉な糸杉とニワトコである。オリーブと月桂樹は「四月」で水の精と詩神がイライザのために集めた植物に他ならず、ダイドーとイライザ(エリザベス女王)の近似性が仄めかされている。ただしダイドーは素朴な羊飼いを軽蔑せずに、彼らを自宅に招いてケーキやビスケットでもてなすという、田園に暮らす者たちの庇護者という面もあわせ持っている。「四月」でイライザのもとに参集するのは羊飼いの処女に限られていたが、ダイドーは男女の分け隔てをすることはない。さらに「偉大な羊飼いロビン」(greate shepheard Lobbin, l. 113)は、花々を集めて作った小冠や指輪をダイドーに贈り、彼女はそれを何にも換えがたく想っていたという。この二つの点においてダイドーは人間味を備えた女性として描かれており、男を寄せつけない処女王イライザや、コリンを無視する冷淡なロザリンドとは異なる。

哀歌の後半では哀悼から賛美に一転して、コリンはダイドーの魂が永遠に緑を讃える理想郷エリシウムに迎えられ、幸福に暮らしていることを讃える。生前のダイドーは「貧

しい羊飼いの誇り」(poore shepherds pryde, l. 198)であったが、今や「いと高き神々の誉れ」(The honor...of highest gods, l. 197)に変貌したのである。かくしてコリンは我が苦悩は尽きたとして歌をやめる。個人的な感懐にあふれたマロのエレジーに比べると、コリンの歌は紋切り型の表現が多く、ダイドーに対する親近感が感じられないことは確かである。だが「ダイドーは先に行った(次は誰の順番か)」(*Dido is gone afore (whose turne shall be the next?)*, l. 193)という詩句に、自分もエリシウムに迎えられたいというコリンの願望を読み取ることはできよう。なぜなら、そこは「危難が羊飼いを襲うことはない」(No daunger...the shepherd can astert, l. 187)場所なのだから。

『羊飼いの暦』の掉尾を飾る「十二月」は、四季に喩えて自らの生涯を振り返るコリンの独白になっており、全体の構造や多くの詩句をクレマン・マロの「国王に捧げる牧歌」に負っている。この借用を最初に指摘したトマス・ウォートンは「十二月」を「もっとも完成された優美な牧歌」と褒めながらも「クレマン・マロの字義通りの翻訳」と記している。だがリーマーは両者の相違点について、マロがパトロンのフランソワ一世を愉しませるために愉快な少年時代を回顧するのに対して、スペンサーはパロンに関する詩行を無視し、ロザリンドへの恋に悩み、老齢を迎えて死を意識するコリンの憂鬱な姿を描いていると指摘する。同様にショアは、マロの詩が「牧歌的な間奏曲」であるのに対して、スペンサーの詩は「牧歌的な告別」に他ならないと、その違いを表現している。(19)

マロは「国王に捧げる牧歌」で羊飼いのロビンとなって登場し、パーンに見立てたフランソワ一世を讃えながら、自らの人生を四季になぞらえて歌う。ロビンは春には野山を駆け巡って動植物に慣れ親しみ、父から詩歌の手ほどきを受けた。夏には年相応の手作業や労働に精を出し、薬草の知識を習得し、ルイズのために哀歌を作り、マーリンと歌比べに興じ、ついにパーンの寺院で朗誦することを許される。秋になるとロビンは明示されない不安のために笛を奏でることを躊躇するようになるが、冬には再び笛を手にとって夏の頃よりも熟成された牧歌を歌う。全篇を通じてロビン＝マロはパーン＝フランソワ一世の庇護下にあり、最後に王から邸宅を下賜されるなど、両者の関係がかなり親密であったことがうかがわれる。(20)

「十二月」で語られるコリンの前半生は、おおむねロビンの成長過程をなぞっている。春にあたる青春期には、自由気ままに野原や森で遊び戯れ、またレノックという老いた羊飼いかから詩歌の手ほどきを受けた。夏の成年期に達すると、羊の小屋や魚籠を作り、薬草の知識を習得する。だがコリンはロザリンドの出現によって、ロビンとはまったく

異なる人生を歩むことになる。マロの牧歌にもロビンが夏に「金髪のエレーヌ」(Helayne la blonde, l. 123)に贈り物をするという件はあるが、コリンはつれないロザリンドのために苦しみ「僕に王手をかけたのは愛だと彼らは言うが、彼を憎悪と呼んだほうがふさわしかった」(Loue they him called, that gaue me checkmate, / But better mought they haue behote him Hate, ll. 53-4)と嘆くに至る。

秋の熟年期を迎えたコリンは失意に沈み、期待していた実りもほとんど得られず、ロザリンドに対する恋は破れ、笛を吹くこともやめてしまう。晩年期の冬に至ると、顔には深い皺が刻まれ、喜びもすっかり失せて、笛を木にかけた(詩作をやめた)後は、ただ死を待つばかりである。牧歌集の表題となった「暦」と四季は循環する時間を表わし、また「十二月」と「一月」が同じ韻律形式を持つこともこれを裏書きするが、冬に至ったコリンの人生が春のごとく再生されることはない。かくして全篇の最後でコリンは、牧歌的な世界を構成する歓びと羊と森に別れを告げ、そしてロザリンドに最後の言葉を伝えることを親友のホビノルに託すのである。

ロビンとコリンの冬は対照的である。ロビンは秋にオークに掲げた笛を冬に再び手に取り、夏よりも高揚した明快な調べ、技量と旋律と音調において歌と呼ぶに値する「田園風の牧歌」(une eglogue rustique, l. 249)を奏でるといふ。だがコリンは厳しい冬に際して「僕の詩神は声がしゃがれ、この難儀に飽いた」(My Muse is hoarse and weary of thys stounde, l. 140)と、笛を木に掲げて牧歌的世界に別れを告げる。二人の運命を分けたのはパロンと恋人の存在である。ロビンはパーンから詩人として認められて加護を受ける。一方E・Kがこの牧歌は「パーンに対するコリンの訴えで終わる」と記しているにもかかわらず、コリンがパーンに我が歌を聞きたまえと呼びかけるのは冒頭だけで、結局パーンの恩寵が彼にもたらされることはない。またコリンの人生に影を落とすのはロザリンドに対する報われない恋であり、そのために彼はどこにも安らぎを見つめることはできず、牧歌の世界に別れを告げる。「十一月」でかすかな希望を抱いていたエリシウムにコリンが迎えられないことはないのである。

(二) 羊飼いたちの気晴らし

続いて「気晴らし」という主題に分類される「三月」と「八月」(四月についてはすでに触れた)を取り上げる。どちらの牧歌も二人の羊飼いの対話という形式を取り、失意に満ちたコリンの歌とは対照的に、軽妙なやり取りが作品の中核をなしている。「三月」は春にふさわしい恋や他の愉しみを主題にしており、サンザシが「柔らかい頭をも

たげ」(vtter his tender head, l. 15)、フローラの命によって花々が咲き始めるなど、自然は再生の時を迎えて繁茂しようとしている。周囲の華やいだ雰囲気に刺激された羊飼いのウィリーが、レテの湖(正しくは川)で眠る小さな愛の神を目覚めさせようと提案すると、相方のトマリンは快活な愛の神は常に獲物を求めて飛び回っていると反論する。というのもトマリンは愛の神を自ら目撃したからだ。

トマリンは仲間の羊飼いたちと狩りに興じている最中に、ツタの茂みで何か生き物が動くのを見る。彼はそれが妖精や悪鬼や蛇であろうとも、「度胸を出して、目覚めさせたくてたまらなくなった」(My courage earnd it to awake, l. 77)のために勇ましく矢を投じると、孔雀の尾のような斑の翼を生やした裸の少年が飛び出してきた。少年が銀色の弓をこちらに向けたために、トマリンは彼をめがけて次々と矢を放ち、続いて軽石を投げつけるが少しも当たらず、逆に少年の放った矢を踵に受ける。その時は何も感じなかったが、次第に傷が疼くようになり、今ではひどく膿んできて、痛みを止めるすがわからぬとトマリンは嘆く。これを聞いたウィリーは、かつて父親が腐肉を食らうカラスを捕まえようと仕掛けた網に、愛の神が掛かったことがあるという話をして、トマリンを傷つけたのが愛の神に他ならないと断言する。

この挿話の原典であるビオンの第四牧歌では、鳥撃ちの少年がツゲの木に止まっている大きな鳥(実は愛の神)を捕まえようと鳥もちをつけた棹をふるうが、これを捕まえることができない。少年が師匠の老人に事の次第を説明すると、老人はその危険な獲物を捕まえてはならないが、やがて少年が成長すれば向こうから寄ってくるだろうと諭す。またビオンを模倣したロンサールの「愛の鳥」でも、大きな鳥を鳥もちで捕らえようとして失敗した少年が、占いを生業とする老婆に相談したところ、それは人に苦痛を与える愛の神であり、逃れたのは幸いであったと慰められる。(21)

ビオンとロンサールの詩では、恋愛経験を十分に積んだ老人が未成熟な少年を諭すという設定になっているが、スペンサーはこの役割を羊飼いの少年ウィリーに振っている。確かにウィリーは父親の体験談を耳にしている分だけ、トマリンよりも成熟しているかもしれない。だが彼は身をもって愛を経験したわけではないために、トマリンに適切な忠告をすることはできず、ただ愛の神を捕らえた父親が「そのために復讐されるだろう」(Whereof he wilbe wroken, l. 108)と語るにとどまる。そもそもウィリーがレテの湖で眠る愛の神を起こそうと提案した理由は、踊りを導いてくれるように祈るためであった。このような文脈と照らし合わせた時に、ウィリーの寓意「蜜と胆汁が愛には含まれている。蜜も多いが、胆汁はさらに多い」には、不自然さがつきまとうと言わざるをえない。(22)

またトマリが愛の神から受けた踵の傷について、E・Kはヒポクラテスを引き合いに出しながら、踵から陰部につながる血管が切れると、その部位は冷たくなり生殖力がなくなると注釈をつけている。またアキレスの踵を思い起こせば、愛がトマリにとって致命傷になることは容易に想像できる。トマリンの負傷には予兆があり、三日前の朝に彼が悲しい気持ちで目覚めると、雌羊が穴に落ちて両足の関節が外れてしまったという。春の自然が豊かな様相を呈し始める一方で、トマリに災厄のイメージがつきまとう。トマリが遠からずコリンと同じ苦境に陥ることは明らかだ。

「八月」はそれぞれ異なる韻律で書かれた三つの部分から成り立っている。導入部で陽気なウィリーが消沈するペリゴットに理由を尋ねると、後者は「恋は子羊と僕をともに迷わせた」(Loue hath misled both my younglings, and mee, l. 17)と答える。ウィリーは歌合戦をして愚かな気の迷いを吹き飛ばそうと提案し、かくして二人は牛飼いのカディを判定役に選び、互いに賞品を賭けて歌合戦を始める。この歌合戦が中間部にあたるが、E・Kがテオクリトスやウェルギリウスの名をあげているように、ここまでは古典的な牧歌の形式に則っている。だが勝負は痛み分けという判定を下した後に、審判役のカディがコリンの作った失恋の嘆きを歌い出す。この最後の部分にはスペンサーの創意が認められる。

歌合戦の賞品も異色である。ペリゴットが差し出すのは「斑の子羊」(spotted Lambe, l. 37)で、賞品としてはいささか価値が低い。一方のウィリーが賭けるのは「カエデのこぶで作った杯」(A mazer ywrought of the Maple warre, l. 26)で、外側には野生のブドウと気まぐれなツタが絡みつき、内側には激しく争う熊と虎が彫られていて、隣では羊飼いが子羊をくわえた狼を牧杖で打ち殺している。テオクリトスの第一歌やウェルギリウスの第三牧歌において、杯の詳細な描写は牧歌的世界の豊穡さを象徴するが、ウィリーの杯の内側に彫られているのは闘争や殺傷を意味するものばかりである。杯の描写についてミラーは、芸術の力によって衝突から調和が生まれ、「激しい闘争」(fiers warre, l. 28)が「見事な眺め」(a fayre sight, l. 26)に転じていると主張する。だがこの描写を「鉄の時代における生活の実態」と見なすジョンソンや、「牧歌的な閑暇に攻撃的に敵対し反目する自然界」と解するローゼンバーグに賛同したい。(23)

歌合戦自体も独特で、二人が行きつ交わり歌う「回旋歌」(roundle, l. 125)は、テオクリトスを思わせる卑俗さに満ちている。

Per. The glauce into my heart did glide,

Wil. hey ho the glyder,
Per. Therewith my soule was sharply gryde,
Wil. such woundes soone wexen wider.
Per. Hasting to raunch the arrow out,
Wil. hey ho Perigot.
Per. I left the head in my hart roote:
Wil. it was a desperate shot.
Per. There it ranckleth ay more and more,
Wil. hey ho the arrowe,
Per. Ne can I find salue for my sore:
Wil. loue is a curelesse sorrowe. (ll. 93-104)

ペリ まなざしが僕の心に滑り込んだ。
ウィー ヘイホー、滑り込む。
ペリ それで僕の魂は鋭く貫かれた。
ウィー そんな傷はすぐに広がる。
ペリ 矢を引き抜こうと急いだが、
ウィー ヘイホー、ペリゴット。
ペリ 矢じりが心の奥に残った、
ウィー それは致命的な一撃だ。
ペリ 傷はますます痛みが増して、
ウィー ヘイホー、矢傷だ。
ペリ 痛みに効く薬も見つからない、
ウィー 恋は治らぬ悲しみだ。

このようにペリゴットの一目惚れをめぐって他愛もないやり取りが続いていくが、互いに自分の歌を披露して技を競い合う古典的な歌合戦とは異なり、もっぱらペリゴットの歌が先導し、ウィリーはそれを茶化するような伴唱をつけるにすぎない。「可愛い娘」(Bellibone, l. 61)のまなざしに貫かれたペリゴットの傷は、「三月」で愛の神に踵を射抜かれたトマリンの傷を思わせる。ウィリーはいずれの牧歌でも恋に悩む若者の聞き手となっているが、「八月」では滑稽な折り返しで応じることによって、ペリゴットの心痛を和らげようとしており、「三月」より成熟した姿を見せている。

カディが引き分けという判定を下すと、ペリゴットとウィリーは満足して互いの賞品を与えあう。伝統的な牧歌であれば、ここでカディが帰宅する刻限だと告げて作品は終わりになる。だがカディは二人の軽い即興風の歌合戦に不満を感じたのか、コリンがつかないロザリンドを想って作った悲しい歌を歌おうと提案する。この歌の内容は、恋に苦悩する男が森の中で不吉なフクロウを退け、代わりにナイチンゲールの歌声に慰めを得るというものである。

Ye wastefull woodes beare witness of my woe,
Wherein my plaints did oftentimes resound:
Ye carelesse byrds are priuie to my cries,
Which in your songs were wont to make a part:
Thou pleasaunt spring hast luld me oft a sleepe,
Whose streames my tricklinge teares did ofte augment. (ll. 151-6)

荒涼とした森よ、僕の苦悩の証人となれ、
僕の嘆きは幾度も森に鳴り響いたのだ。
悩みなき鳥たちは僕の叫びを知っている、
お前たちは歌でそれに応えてくれたものだ。
快い泉は僕をたびたび眠りに誘ったが、
その流れは僕の滴り落ちる涙で水嵩を増した。

これは六行を一連として、各行末の語(woe, resound, cries, part, sleepe, augment)が順番を変えながら(第二連は augment, woe, resound, cries, part, sleepe の順)六回繰り返された後に、締めくくりとなる三行(六つの押韻語がすべて含まれる)を加えた、セステーナという複雑な形式である。同じ語を何度も繰り返さなければならないため、押韻は通常の形式よりもはるかに困難で、しつこい感じがすることは否めない。だがペリゴットとウィリーの素朴な回旋歌に比べると、コリンが優れた詩人の資質を持っていることが浮き彫りになる。回旋歌とセステーナは恋の悩みという同じ主題を扱っているが、最後にペリゴットがカディに「君が歌った彼の悲しみは何とも悲しい」(How dolefully his doole thou didst rehearse, l. 193)と語るように、コリンの深い絶望に比べれば、ペリゴットの悩みは表面的なものにすぎないのである。

(三) 牧歌における諷刺

次に諷刺を交えた「道徳的なもの」(二月, 五月, 七月, 九月, 十月)を取り上げる。黄金時代やアルカディアを希求するがゆえに, 現実の世界に対する不満が諷刺となって表われることは, 牧歌において珍しいことではない。田園から見た都会の悪徳をあげつらうことも, 牧歌の基本的な主題のひとつである。ただしスペンサーの牧歌はマンチュアヌスを模範にしているために, 諷刺は宗教的な問題に限定されており, この点を後世の詩人や批評家から非難されることになる。まず宗教色の薄い「二月」と「十月」を取り上げる。この二篇には「八月」で審判役を務めたカディが登場する。

「二月」の主題は若さと老いをめぐる論争で, 羊飼いの少年カディと齢九十に達する羊飼いやセノットの間で悪罵の応酬が繰り返される。冒頭でカディが冬の厳しい寒さについて愚痴をこぼすと, セノットは夏も冬もありのままに受け入れることが大事だと少年を叱責する。だが意気盛んなカディは老人の忠告を無視するばかりか, 老いと冬は見事に重なると悪口を浴びせる。挑発されたセノットも, 若者は常に春だと思い込んでいるが, やがて冬が来ると自惚れの代償を払うのだと言い返す。この口喧嘩に決着がつくことはないが, カディの「今や自分の小枝も梢も失ってしまって, 俺の芽吹いた枝を切り取りたいのだろう」(Now thy selfe hast lost both lopp and topp, / Als my budding branch thou wouldest cropp, ll. 57-8)という放言は, セノットが秘かに抱えている若さに対する羨望を言い当てている。カディはセノットが積んだ経験や知恵を少しも顧慮せず, 老人の不能をあからさまに罵り, 自分の精力を誇る。二人の対照は彼らの家畜にも影響を及ぼしており, カディの牛が意気盛んで堂々としているのに対して, セノットの羊は生気に欠けてやつれている。これらの描写は「一月」や「十二月」にも見られるが, 現実的なセノットと享乐的なカディの対立は, イソップ寓話のアリとキリギリスを思わせないでもない。

いささか分の悪くなったセノットは, 若い頃にティテュルス(チョーサー)から聞いたという寓話を語る。野原に聳える年経たオークの木が, 根元に生えた野バラから老醜について悪態をつかれるが, 何も言い返すことができない。野バラの訴えを聞き入れた農夫はオークを切り倒してしまうが, オークの加護を失った野バラは冬の風や霜に晒されて枯れてしまう。この寓話が浅薄な若者カディに対するセノットの皮肉な諷刺であることは明白だが, カディは「あなたの馬鹿話は少しも気晴らしにならん」(little ease of thy lewd tale I tasted, l. 245)と言う始末である。オークが野バラを脅威から守っていたように, セノットがカディを保護しているわけではなく, 老人の皮肉も若者にはまった

く通用しない。両者が理解し合うことは永遠にないのである。

「二月」でセノットを罵ったカディは、「八月」でウィリーとペリゴットの歌合戦を取めた後にコリンの嘆き節を歌い、「十月」では自らが詩人として登場する。E・Kは「十月」の原典としてテオクリトスの第十六歌とマンチュアヌス（の第五牧歌）をあげている。前者はシラクサの支配者ヒエロンを讃えながらも、詩人に加護を与えることを渋る富者に対する皮肉に満ちている。一方後者では富裕なパトロンのシルヴァヌスが羊飼いのカンディドゥスを怠惰だと非難すると、詩人は羊の世話と歌うことを両立させることはできず、また飢えや寒さで苦勞しては詩作もままならぬので、無意味な賞賛よりも実質的な報酬（質素な服や食料）を与えよと逆に詰め寄る。シルヴァヌスがローマに行けば詩で富を得るのはたやすいと言えば、カンディドゥスはアウグストゥス亡き後のローマでは美德は滅び、詩人は希望を持ってないと答える。さらにシルヴァヌスが戦争や偉人の行為を歌えば、新たなパトロンも見出せると勧める。だがカンディドゥスは貧しい自分にどうして叙事詩が書けようかと反問し、今の時代には崇高な主題を見出すことはできず、また宮廷には嫉妬や追従に明け暮れるエセ詩人しかいないために、真の詩人は追放されるのが落ちだと断言する。結局カンディドゥスはシルヴァヌスをミダス王に喩えて罵倒を浴びせ、袂を分かつ。(24)

スペンサーが直接の模範としたのはマンチュアヌスで、詩句の借用があちこちに見られるほか、論争を繰り広げるカディとピアズには、それぞれカンディドゥスとシルヴァヌスの立場が投影されている。ただしピアズはシルヴァヌスのような財産家ではなく、カディに山羊の子を一匹やろうかという発言はあるが、これをパトロンとして与える報酬と考えるのは難しい。またピアズはシルヴァヌスのように詩人に対して冷淡な態度を取りはしない。同様にカディはカンディドゥスのように最初から最後まで自らの困窮を強調するわけでもなく、けちなパトロンに対して毒舌を吐くわけでもない。ハーディンが指摘するように、カンディドゥスとシルヴァヌスが詩人とパトロンという上下関係にあるのに対して、カディとピアズはともに羊飼いという対等の関係で結ばれている点は大きく異なる。(25)

「十月」の冒頭でピアズから惰眠を貪るなど責められると、カディは長いこと笛を吹いて皆を楽しませてきたが、自分は何を得たであろうかと嘆く。ピアズは「賞賛は報酬に優る」(the praise is better, then the price, l. 19)という見地から、これまでカディは歌で若者たちの無分別な欲望を抑制して正しく導いてきたと持ち上げ、彼の技術はプルートスの館から妻を連れ戻したオルフェウスの妙技に匹敵するとまで言う。しかしカディ

は「そんな賞賛は煙も同然だ」(Sike prayse is smoke, l. 35)と吐き捨て、あくまでも物質的な報酬が必要だと言い張る。理想主義的なピアズに対する現実的なカディというところであろうか。そこでピアズは牧歌に見切りをつけて、血なまぐさいマルスや戦争や馬上槍試合について歌えば、イライザの耳にも届き、君の名は天にまで響くだろうと、叙事詩人に転向することをカディに勧める。これに対してカディは『牧歌』から『農耕詩』を経て叙事詩『アエネーイス』を書くに至ったティテュルス(ウェルギリウス)の例をあげながらも、彼のパトロンであったマエケーナスやアウグストゥスはとうに亡くなり、また美德が失われた現代では英雄詩で歌い上げるべき主題が見つからないと嘆く。

この展開はおおむねマンチュアヌスの原詩に沿っているが、スペンサーの独創と思われる部分もある。カディはコリンが恋に苦しむことがなければ、白鳥(卓越した詩人の象徴)のごとく舞い上がって甘美に歌ったであろうと、彼の不幸な境遇に同情する。これに対してピアズは恋がコリンに高く昇ることを教えたのだと反論する。ここでもピアズは恋を「不滅の鏡」(immortall mirrhor, l. 93)というプラトンの表現で捉えており、カディの言う現世的・肉体的な恋とは意味合いが異なる。またカディは詩歌には靈感が不可欠であると主張して、ワインを十分に飲めば詩歌が泉のようにあふれ出し、「見事な半長靴」(buskin fine, l. 113)を履いて跳躍する術を詩神や「異装のペローナ」(queint *Bellona*, l. 114)に教えられると豪語する。「半長靴」は悲劇を、戦争の女神「ペローナ」は叙事詩をそれぞれ表わし、酒の力を借りれば牧歌よりも優れた詩歌を易々とものにできるという意味である。だが一夜の酩酊で長い詩が書けるはずもなく、カディは自分の心は熱くなる前に冷えてしまうのだと告白し、「ここで僕らは細い笛を安全に奏しよう」(Here we our slender pipes may safely charme, l. 118)とあくまで牧歌詩人としてとどまることを選ぶ。

E・Kはカディを「詩人の完璧な模範」と呼ぶが、カディが歌うのは「小粋な歌」(The dapper ditties, l. 13)にすぎず、叙事詩や悲劇など崇高な詩歌を書くつもりは彼にはない。たとえ詩歌の若い芽が古い幹から伸び始めたとしても、人間の愚行を覆い隠さねばならないから、たちまち「下品な歌」(rybaudrye, l. 76)となってしまう、笛吹きトムの奏でる旋律のほうがまだとカディは自嘲気味に言う。ピアズは詩人として大成するために進むべき道(叙事詩、称賛詩、恋愛詩)を示唆するが、カディは牧歌から離れようとはしない。またカディは自分を冬になると弱って寝込んでしまう「キリギリス」(the Grashopper, l. 11)に喩えているが、「二月」の冒頭で寒風に不満を漏らしていた時から進歩は認められない。

残る三つの牧歌「五月」「七月」「九月」はいずれも宗教的な主題を扱い、登場する羊飼いは聖職者を表わしていると考えられる。「五月」では「十月」に登場したピアズが、聖職者の態度や品行についてパリノードと論争を交えた後に、狐にだまされて食われてしまう子山羊の寓話を語る。E・Kはピアズがプロテスタントで、パリノードがカトリックを表わすと記しているが、これを鵜呑みにする批評家は少ない。冒頭でパリノードは「明るい緑の服」(gawdy greene, l. 4)を着た若者たちが五月祭を楽しむさまを眺め、自分たちの「灰色の上着」(bloncket liueryes, l. 5)に違和感を覚えると漏らす。ピアズはそのような愚行は若者にこそふさわしく、年かさの分別を備えた我らには関係ないと諫める。だがパリノードは羊飼いたちが笛や太鼓の音に合わせて森に行進し、五月祭の王と女王を選ぶ様子を羨ましそうに見つめる。ピアズは雇われの身である羊飼いたちが羊の世話を怠り、また雇い主も羊毛が売れさえすれば後は関知しないことを責める。するとパリノードはピアズが楽しみを欠いているために彼らに悪意を持つのだと指摘し、神が羊飼いに与えた善意は生きている間に使うべきだと主張する。これに対してピアズはパリノードを「俗世の子」(worldes childe, l. 73)だと非難し、聖職者は俗世の人間と同じ生き方をしてはならず、善意も誤った意図のために悪しき結果を招くことがあると反論する。

二人の論争は聖職者が俗世といかに関わるかという問題を扱っている。パリノードが現世を肯定的に受け止め、享乐的な異教の祭も容認するのに対して、ピアズは正しい道を歩まなければ富も信用も役には立たず、世俗の誘惑を断ち切って生きなければならないと禁欲的な立場を取る。ピアズが理想とするのは、原初において羊飼いは(聖職者)が羊(信者)以外には遺産も土地も持たず、パーン(キリスト)に導かれて清貧に暮らしていた時代である。しかし時を経て悪徳や傲慢が芽生え、羊飼いたちも墮落の道をたどり、羊や他の羊飼いを食うようになったとピアズは憂える。カレンの表現を借りれば、パリノードが世界は墮落しなかったかのようにふるまうのに対して、ピアズは世界が墮落したことを誇張するのである。(26)二人の主張は決して噛み合わず、楽観的なパリノードが「争いもすぐに和解で終わるだろう」(So conteck soone by concord mought be ended, l. 163)と話を向けても、ピアズは「光と闇をともに持つ和解があるか」(what concord han light and darke sam, l. 168)とにべもない。

後半でピアズは狐と子山羊の寓話を語る。ある夏の日、夫を敵の罠によって失った母山羊が、留守中に狐が来て何を言っても戸を開けるなど子山羊に言い残して、森に出かける。まもなく行商人に化けた狐が戸口に立ち、自分は病で苦しんでいると子山羊の同情を引き、次に自分は日焼けした羊だから君とは親類だと親近感を抱かせ、最後に背

中の荷物から鏡を取り出して好奇心に訴える。鏡にすっかり魅せられた子山羊は、狐を家の中に入れてしまい、狐はさらに安びか物を並べてみせる。だが子山羊が籠に残った鈴を取ろうとした瞬間、狐は子山羊を籠に押し込めて走り去った。急いで帰ってきた母山羊は、床に散らばった商品を見て万事を悟る。偽りの友情を結ぶべからずというのが、この寓話の意味である。

E・Kによれば、子山羊は素朴で信心深いキリスト教徒を指し、また母山羊はキリストで、二枚舌の欺瞞に用心せよと子山羊に警告する。狐は偽りの不信心のカトリック教徒であるから信用できないし、親交も結べないという。だが母山羊は不安な思いが心をよぎり、戸口でつまづくという験の悪さにもかかわらず、「草を食むか、戯れるか、良しと思ったもの」(To brouze, or play, or what shee thought good, l. 179)のために外出するのである。さらに母山羊は狐に注意せよと子山羊に言い聞かせるが、肝心な狐を見分ける方法を教えなかったために、行商人の格好で日焼けした羊と称する狐の姦計を阻むことはできなかつたとレインは指摘する。このような母山羊がキリストであるはずもなく、彼女は務めを果たさない無責任な聖職者を指すのであろう。むしろヒュームが指摘するように、敵の畏にかかって「寿命を時ならぬ苦悩で断ち切られた」(cutte of hys dayes with vuntimely woe, l. 199)父山羊こそキリストに他ならない。(27)

ピアズの寓話は光と闇は交わるはずもないので、偽りの友情を結ぶべからずという、パリノードに対するあてつけになっている。しかし当の本人はその含意に気づかないばかりか、この寓話を「我らがジョン師」(our sir Iohn, l. 309)が日曜日にする説教のネタに提供して、狐のずる賢さを皆に知らせてやろうと言う。E・Kは「我らがジョン師」はカトリックであり、この表現が羊飼いの野卑さに似合っているばかりか、無学な司祭を嘲る意図もあると記す。だが五月祭を愉しむ若者たちを羨ましげに眺め、悪意のこもった寓話にも動じないパリノードのほうが、排他的で禁欲的なピアズよりもはるかに人間らしく思われてならない。

「七月」では丘の上に座る山羊飼いモレルと、平野に立つ羊飼いトマリンが、丘(山と同一視される)と野の価値をめぐる論争を繰り広げる。E・Kはこの牧歌が「良き羊飼い(トマリン)の荣誉と推奨のため、野心に満ちた牧者(モレル)の恥と非難のため」に書かれたと述べた上に、聖書で山羊は邪悪で神に見放された存在であり、その飼い主も同じに違いないと断定的な注釈を施している。スペンサーが原典としたマンチュアヌスの第八牧歌の前半では、丘の住人カンディドゥス(詩人のペルソナ)と、谷間に住むアルファスが互いの居住地を自慢し合うだけで、両者のいずれかに明確な優劣が与

えられているわけではない。(28) だがスペンサーは「六月」で楽園に喩えられるホビノルの谷間と、コリンの失意を表わす不吉な丘を対比したように、ここでも丘と野にそれぞれ意味づけを試みている。

冒頭でモレルが丘を登ってこいと誘うが、トマリンは高所から落ちるのは危険な上に、荒れた丘には灼熱の太陽から身を隠す場所もないと拒絶し、逆に野に降りてこいと言いつ返す。このやり取りを契機として互いの土地自慢が始まる。モレルは丘には聖人の名前がついているとして、西海岸を守る聖マイケル山、ケント人の誇る聖ブリジッドのあずまや、キリストが弟子たちに説教をしたオリーブ山などをあげる。かつて山の上でひとりの愚者(アダム)が墮落したために、すべての羊飼いは楽園を追われることになった。また詩神たちが住まい、月の女神がエンディミオンと過ごしたのも丘であった。この丘には牧神たちが通い、ここを水源とするメドウェイ川ではニンフたちが水浴びをし、山羊に効くさまざまな薬草も取れる。何よりも「丘は天に近いので、そこからの道もたやすい」(the hills bene nigher heuen, / and thence the passage ethe, ll. 89-90)とモレルは断言する。マンチュアヌスの牧歌でカンディドゥスは、キリスト教に縁のある山を列挙し、大理石や黄金や木材や薬草など山の産物を数え上げ、山に暮らす男たちの強靱さや有能さを賞賛する。モレルの発言は多くをマンチュアヌスに負っており、丘の優位を主張するためにキリスト教の権威を借りるのもその一例である。ただしキリスト教の楽園エデンと、ギリシア神話の楽園にも似たラトモス(月の女神とエンディミオンの愛の巣)への言及はマンチュアヌスに見られない。モレルは「五月」のパリノードと同様に現世に充足しており、楽園に対する執着も共通する。

これに対してトマリンは野原を擁護するが、その理由づけは基本的にキリスト教の枠内に収まっており、倫理的な傾向がきわめて強い。無垢な羊たちは地上で十分に満足し、薬草も必要ないほど健康を保っているが、山羊とともに丘に行けば墮落することは必定だ。自分も聖人を讃えることに異存はないが、それは山と何ら関係がない。また最初の羊飼いやベルは野原で質素な暮らしを送り、神への崇敬を片時も忘れずに生贄を祭壇に捧げた。ヤコブの十二人の息子たちや、神と言葉を交わしたモーゼも同様だ。ただし羊を捨て置いてヘレンを捕まえに行ったパリスは例外で、彼は傲慢であるがゆえに高い代償を払うことになった。かつて羊飼いはみな慎ましく友好的に暮らしていたが、緋色の衣をまとった最近の羊飼い(高位聖職者)は万民を支配し、望むがままに威張り散らしている。原初のキリスト教に対するトマリンの思いは、昔の羊飼いは清貧で敬虔な生活を送っていたが、現在の羊飼いは権力や財力を求めて墮落してしまったという「五月」におけるピアズの主張とほぼ同一である。(29) さらにトマリンは「五月」でピアズの

論争相手だったパリノードの名前をあげ、彼がローマで見聞した高位聖職者たちの腐敗を紹介する。「傲慢な羊飼いたち」(syrlye shepherdes, l. 203)は羊の世話を他の者に委ね、羊にはパン屑を食べさせる一方で、自分たちはパンを食べているというのである。この挿話もトマリリンとピアズの類似性を示している。

代わりにトマリリンが模範とすべき人物と見なすのは、やはり「五月」でピアズが言及していたアルグリンド、彼は「階位の高い聖職者」(a shepherd great in gree, l. 215)であったが、「丘の上」(vpon a hyll, 217)にいた時に、雌の鷲が落としかした貝で頭を直撃され、治らない痛みで臥せているという。アルグリンドはカンタベリー大主教グリンドルを指し、エリザベス女王(雌の鷹)から命じられた一部教会勢力の抑圧に反対したために、職を解かれた(貝で頭を直撃)という経緯がこの寓話のもとになっているという。(30) アルグリンドが「丘の上」にいた高位聖職者であるという記述は、丘の上に座るモデルを思わせ、トマリリンはアルグリンドの災いに学んで低地を好むと語る。ただし不思議なことに、モデルとトマリリンはともにアルグリンドの不運に同情しており、彼が傷ついた原因は傲慢や野心のためではないとされる。これは高所にいるのは悪しき者だというE・Kやトマリリンの主張と一致しない。引き分けて終わることの多い歌合戦の形式に倣ったものと考えられるしかないが、全体の構成から見てあまり納得のいく結論とは言えない。

「九月」もマンチュアヌスの第九牧歌に示唆を受けており、聖職者の正しい務めとは何かという主題を諷刺的に扱う。利益を求めて羊を遠くの国に追って行ったディゴン・ディヴィーは、九ヶ月の間にすっかり零落して故郷の田園に単身戻り、聞き手役のホビノルに体験談を語る。富への妄想に憑かれたディゴンが訪れた土地はローマと推測されるが、その地の羊飼(聖職者)たちは盗みや詐術に明け暮れ、高慢や奢多に染まっており、正道を踏み外した者たちばかりだとディゴンは口汚く罵る。彼の認識によれば、世の中が墮落したのは羊飼いが「獣同然で愚かな」(bestly and blont, l. 109)のために他ならず、羊(信者)も羊飼いを無視して勝手気ままにうろつくので、災いにあつたり狼の餌食になってしまうのだという。ホビノルが英国ではサクソン時代に狼は絶滅し、代わりに狐の数は増えたと口を挟むと、ディゴンは羊の皮をかぶった狐はもっと狡猾だと言いながらも、狼をめぐる羊飼(ロフィー)の寓話を語り始める。

昔、悪い狼が犬の泣き声を真似て番犬のラウダーを野原に追いやり、その間に羊や山羊をくわえ込んで森に逃げ込むという所業を繰り返していた。また狼はロフィーの声色を使って、外に出てきたラウダーに噛みついたが、これは羊飼(ロフィー)の機転によって何とか事なきを得た。結局「アルゴスのような目」(Argus eyed, l. 203)を持ったロフィーは、

偽のなりをした狼を捕まえて退治する。つまり狼の悪巧みを打ち砕くロフィーは羊を守る良い羊飼いで、前半でディゴンが非難する悪しき羊飼いと対照をなす。この寓話からディゴンが導き出す教訓は「絶えず用心に用心を重ねて、急な暴力から羊を守ること」(euer liggen in watch and ward, / From soddein force theyr flocks for to gard, ll. 234-5)である。ディゴンは「五月」のピアズや「七月」のトマリンと同様に、原初の樂園が失われたことを嘆き、現在の状況を悪しざまに罵る羊飼いの系列に属する。

一方ホビノルは「僕らも他の者と同じ生身の体、なぜそんな辛さに縛られるのか」(We bene of flesh, men as other bee. / Why should we be bound to such miseree, ll. 238-9)と嘆き、気分を転換する休息がなければ良いものも壊れてしまうと主張する。ホビノルは「五月」のパリノードや「七月」のモレルと同様に現状を肯定し、永遠に樂園を夢想していた羊飼いの系譜に属する。ただしホビノルは「六月」で樂園に喩えられる田園生活を満喫していたが、「九月」ではその幸福にも翳りが見え始めている。彼はディゴンの長話に加え、吹きすさぶ西風に晒されて、体がひどく強張って疲れたと漏らす。またディゴンの比喩的な表現に頭が混乱すると言い、

ディゴンのあからさまな聖職者批判に対しては苦言を呈する。全般的に見て、ホビノルは苦境に陥ったディゴンに対する同情に少々欠けるところがある。確かにホビノルは最後に自分の小屋にディゴンを招いて「豆わらの寝床」(a vetchy bed, l. 256)を提供しようとして申し出る。これはウエルギリウスの第一牧歌で、悠々自適の生活を送るティテュルスが、土地を没収されて異国に流れていくメリボエウスに一夜の宿を提供し、柔らかい寝床と果実やチーズでもてなすという一節の模倣である。しかしメリボエウスが結局は平和な田園世界を去らざるを得ないように、ディゴンの将来についても明るい兆しは一切見られない。またティテュルスがメリボエウスの身に降りかかった災難を本質的に理解できないように、ホビノルもディゴンに十分な慰めを与えることはできないのである。

(四) 十八世紀前半における『羊飼いの暦』の受容

最後に十八世紀前半において詩人や批評家が『羊飼いの暦』について述べた意見を概観する。ドライデンは『叢林』(1685)の序文で、ドーリア方言はテオクリトスの牧歌に「田舎風の比類ない甘美さ」をもたらしており、これは厳格なラテン語で書いたウエルギリウスには得られない長所で、スペンサーも『羊飼いの暦』で自分なりのドーリア方言を試みたが、英語でも成功はおぼつかないだろうと述べている。ドライデンはその理

由を明示していないが、テオクリトスの牧歌に散見される野卑な表現に関係があることを匂わせている。だがドライデンは英訳したウェルギリウスの『牧歌』(1697)の献辞で、スペンサーをテオクリトスとウェルギリウスに次ぐ第三の牧歌詩人と呼び、現代語で『羊飼いの暦』に比類すべき牧歌はないと激賞するに至る。さらに「我が国の北の方言の巨匠」で「チョーサーの英語に精通した」スペンサーは、テオクリトスのドーリア方言を正確に模倣しているために、彼の描く愛は「芸術の知識や我々が良識と呼ぶ儀式で墮落する以前に、神が両性に吹き込んだ情熱の完璧なイメージ」になっているという。(31) このようにスペンサーの用いた方言に対するドライデンの評価は大きく変化しているが、その理由については不明である。

牧歌論争の発端となった二人の詩人のうち、フィリップスは自作の牧歌でスペンサーの語彙や表現を積極的に模倣しており、当然のことながら「テオクリトス、ウェルギリウス、スペンサーだけが牧歌の真の性質を見出した詩人である」と序文で記している。一方のポープは「牧歌論」(1716)で、現代語で書かれた牧歌で『羊飼いの暦』が最も完璧だというドライデンの発言を引きながらも、スペンサーの牧歌が持つ種々の欠点をあげつらう。『羊飼いの暦』に収められた牧歌は長すぎ、寓意的すぎ、牧歌に不向きな宗教問題を取り上げている。スタンザは一定せず、表現は冗長なきらいがある。テオクリトスのドーリア方言は美と適切さを兼ね備え、偉大な人物たちが使用していたが、スペンサーの用いた方言はすでに廃語になったか、卑しい階級の人々にしか使われていない。簡素であることと田舎臭いことは別物である。スペンサーが暦という概念を牧歌に採用したことで、人間生活と自然の変化を対応させたことは誉めるべきだが、三ヶ月にわたって同じような描写が続くのはいただけない。(32)

ポープの批判は十八世紀前半におけるスペンサー評価のひとつの基準であり、特に『羊飼いの暦』に見られる寓意性、方言の使用、宗教に関わる主題を取り上げたことに対する非難は、後の詩人や批評家たちにも受け継がれることになる。ポープの盟友ジョン・ゲイは、スペンサーに倣ったフィリップスの牧歌を揶揄する目的で『羊飼いの一週間』(1714)を書いた。ゲイは序文でスペンサーの「田舎風というよりもガラガラと響く韻律」や、牧歌で信仰上の疑念を取り上げたことに異議を唱え、スペンサーの用いた方言は、いつの時代にもどの場所でも使われたことがないと批判する。(33)

『スペンサー作品集』(1715)を編纂したジョン・ヒューズは、『羊飼いの暦』が技巧的なウェルギリウスよりも簡素なテオクリトスを模範にしていると指摘する。スペンサーはテオクリトスに倣った簡素を表現するために、またチョーサーへの尊敬から田舎風の文体を選んだ。古めかしい文体が過度になる点についてスペンサーは過ちを犯して

いるかもしれないが、情景や登場人物を讃える田舎風の詩句が大いなる美を讃えていることは、スペンサーの精神と文体を受け継いだフィリップスの牧歌を読めば、誰も納得するであろう。スペンサーが牧歌に諷刺を混ぜたことには批判があり、これを完全に正当化することはできないが、『羊飼いの暦』における倫理の卓越性はこの欠点を大いに埋め合わせている。カトリック司祭の悪徳を糾弾するために、彼が寓意を用いたのも効果的である。(34)

ギルドンは『詩法大全』(1718)でフィリップスの牧歌を高く評価するが、彼でさえもスペンサーの言語については批判的である。偉大なスペンサーも文体においては錯誤に陥り、フィリップスはこの点を見事に避けている。スペンサーはドーリア方言を模倣する代わりに北方の方言を読者に提示するが、このために彼の牧歌は注釈者の助けを借りなければ理解できなくなったというのである。(35) ギルドンがスペンサーの文体を批判しながらも、それに倣ったフィリップスを例外扱いするのは奇妙なことである。ギルドンはフィリップスを揶揄しようとするポーブやゲイの「卑しく悪意に満ちた努力」に触れ、その試みが失敗に終わったことは明らかであると述べている。ギルドンはポーブの仇敵として『愚物列伝』で罵倒された人物であり、フィリップスを必要以上に賞賛するのはポーブへの反感の裏返しであろう。

このように十八世紀初頭における『羊飼いの暦』の評価は、毀誉褒貶が半々といったところで、スペンサーが寓意的な表現を多用したこと、古語や方言を羊飼いの言語として選んだこと、宗教的な主題を扱ったことには批判が寄せられた。特にジョンソンが「作爲的な野蛮さ」と呼んだように、スペンサーの用いた言語の人工性には風当たりが強い。(36) しかし古典語で書かれたイタリアの牧歌を英国に移植する手段として、スペンサーが英国の古語や方言を選んだことは、ひとつの見識であったように思われる。『羊飼いの暦』がなければフィリップスやゲイの英国風牧歌は生まれなかったはずだからである。

注

- (1) 牧歌論争については、拙論「十八世紀初頭の英国における牧歌論」『駿河台大学論叢』第42号(2011) 109-33を参照されたい。
- (2) Edmund Spenser, *The Shorter Poems*, ed. Richard A. McCabe (Harmondsworth: Penguin, 1999)をテキストに用いる。他に *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition*, eds. Edwin Greenlaw et al, 11 vols (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1943) vol. 7, *Edmund Spenser's Poetry*, ed. Hugh Maclean, second edition (New York: Norton, 1982), *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*, eds. William A. Oram et al, (New Haven: Yale University Press, 1989), Edmund Spenser, *Selected Shorter Poems*, ed. Douglas Brook-Davies (London: Longman, 1995)を参照した。
- (3) E・Kの正体に関しては *Variorum*, 7: 645-50に諸説が紹介されている。
- (4) Philip Sidney, *A Defence of Poetry, Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, eds. Katharine Duncan-Jones & Jan Van Dorsten (Oxford: Clarendon Press, 1973) 112., *Ben Jonson*, ed. C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson, 11 vols (Oxford: Clarendon Press, 1947) 8: 618.
- (5) Clement Marot, *Oeuvres Lyriques*, ed. C. A. Mayer (London: Athlone Press, 1964), *Petrarch's Bucolicum Carmen*, trans. Thomas G. Bergin (New Haven: Yale University Press, 1974), Giovanni Boccaccio, *The Latin Eclogues*, trans. David R. Slavitt (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2010), *The Eclogues of Baptista Mantuanus*, ed. Wilfred P. Mustard (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1911), Baptista Spagnuoli, *The Eclogues of Mantuan*, trans. George Turberville, ed. Douglas Bush (1567; New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1977), *The Bucolicks of Baptist Mantuan*, trans. Thomas Harvey (1656; Ann Arbor: University Microfilms International, n.d.), Jacopo Sannazaro, *Latin Poetry*, trans. Michael C. J. Putnam (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2009) イタリアの牧歌については Walter W. Greg, *Pastoral Poetry & Pastoral Drama: A Literary Inquiry, with Special Reference to the Pre-Restoration Stage in England* (New York: Russell & Russell, 1959), W. Leonard Grant, *Neo-Latin Literature and the Pastoral* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1965), Helen Cooper, *Pastoral Mediaeval into Renaissance* (Ipswich, D. S. Brewer, 1977)を参照。
- (6) Clive Staple Lewis, *English Literature in the Sixteenth Century excluding Drama* (Oxford: Clarendon Press, 1954) 360. また同様の見解として Patrick Cullen, *Spenser, Marvell, and Renaissance Pastoral* (Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1970) 2-3.

- (7) *The Eclogues of Alexander Barclay*, ed. Beatrice White (London: Oxford University Press, 1928) また Greg, 78-9., Cooper, 118-23. を参照。
- (8) マクレインによれば「四月」のイライザ, 「十一月」のダイドー, ロザリンドもすべてエリザベス女王の寓意であるという。Paul E. McLane, *Spenser's Shepherdes Calender: A Study in Elizabethan Allegory* (Indiana: University of Notre Dame Press, 1961) 13-26.
- (9) W. L. Renwick, *Edmund Spenser: An Essay on Renaissance Poetry* (London: Edward Arnold, 1925) 97-116, 189-90., *Variorum*, 7: 634-41., William Webb, "A Discourse of English Poetrie," *Elizabethan Critical Essays*, ed. G. Gregory Smith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1904) 1: 270-2.
- (10) John W. Moore, JR., "Colin Breaks His Pipe: A Reading of the 'January' Eclogue," *English Literary Renaissance* 5 (1975) 9.
- (11) Nancy Jo Hoffman, *Spenser's Pastorals: The Shepherdes Calender and "Colin Cloute,"* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1977) 50., Ruth Samson Luborsky, "The Illustrations to The Shepherdes Calender," *Spenser Studies* 2 (1981) 26., Steven F. Walker, "Poetry is / is not a cure for love: The Conflict of Theocritean and Petrarchan Topoi in the Shepherdes Calender," *Studies in Philology* 76 (1979) 360.
- (12) Ovid, *Metamorphosis*, trans. Mary M. Innes (London, Penguin, 1955) 47-8.
- (13) Cullen, 114., Thomas H. Cain, *Praise in The Faerie Queene* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1978) 16-7., Louis Adrian Montrose, "'The perfecte paterne of a Poete': Courtship in The Shepherdes Calender," *Texas Studies in Literature and Language* 21 (1979) 40., David L. Miller, "Authorship, Anonymity, and The Shepherdes Calender," *Modern Language Quarterly* 40 (1979) 231., Peter C. Herman, "The Shepherdes Calender and Renaissance Antipoetic Sentiment," *Studies in English Literature 1500-1900* 32 (1992) 23.
- (14) John D. Bernard, "'June' and the Structure of Spenser's *Shepherdes Calender*," *Philological Quarterly* 60 (1981) 310.
- (15) Hoffman, 64.
- (16) Cullen, 88-9. Herman, 28-9.
- (17) Clement Marot, "Eglogue sur le Trespas de ma Dame Loyse de Savoye..." *Oeuvres Lyriques*, 321-37. このエレジーに登場する羊飼いはコラン(Colin)とセノ(Thenot)で、セノの求めに応じてコランが王妃の死を痛むという構成も「十一月」と同一である。Henry Morley, *Clement Marot and Other Studies*, 2 vols (London: Chapman and Hall, 1871) 1: 258-67. に

- 散文訳があり、詩句の借用は *The Shepherd's Calendar*, ed. W. L. Renwick (London: The Scholartis Press, 1930) 220-7. に詳しい。また Annabel Patterson, *Pastoral and Ideology: Virgil to Valery* (Berkeley: University of California Press, 1987) 106-32, Hoffman, 54-8. を参照。
- (18) G. W. Pigman III, *Grief and English Renaissance Elegy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985) 82., Peter M. Sacks, *The English Elegy: Studies in the Genre from Spenser to Yeats* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1985) 48., Leslie T. Whipp, “Weep for Dido: Spenser’s November Eclogue,” *Spenser Studies* 11 (1990) 19., Cullen, 90.
- (19) Thomas Warton, *Observations on the Fairy Queen of Spenser*, 2nd ed. 2 vols (London: R & J Dodsley, 1762) 1: 219., Owen J. Reamer, “Spenser’s Debt to Marot...Re-examined,” *Texas Studies in Literature and Language* 10 (1969) 504-27., David R. Shore, *Spenser and the Poetics of Pastoral: A Study of the World of Colin Clout* (Montreal: McGill-Queen’s University Press, 1985) 92.
- (20) Clement Marot, “Eglogue de Marot au Roy, soubz les noms de Pan & Robin,” *Oeuvres Lyriques*, 343-53. マロが王から邸宅を下賜された件については p.353 を参照。英訳が Reamer, 506-17 (全訳) と Morley, 2: 21-32 (部分訳) にある。またスペンサーはマロの“La Complainte d’un Pastoureau Chrestien” (*Oeuvres Lyriques*, 390-8) の一部も模倣している。この作品の主人公である羊飼いは、全篇を通じてパーン（ここではキリストを表わす）に呼びかけている。
- (21) A. S. F. Gow, *The Greek Bucolic Poets: A Translation into English Prose* (Cambridge: Cambridge University Press, 1953) 154, *Greek Pastoral Poetry*, trans. Anthony Holden (Harmondsworth: Penguin, 1974) 172-3., Pierre de Ronsard, “L’Amour Oyseau,” *Oeuvres Choisies de Pierre de Ronsard*, ed. Paul L. Jacob (Paris: H. L. Delloye & Garnier Freres, 1841) 230-3
- (22) スペンサーは「胆汁」(gall)と「フランス人」(Gaul)をかけていて、エリザベス女王とフランスのアランソン公爵の結婚が危険であることを示しているという。 *The Shorter Poems*, 527.
- (23) Miller, 228., Johnson, 172., D. M. Rosenberg, *Oaten Reeds and Trumpets: Pastoral and Epic in Virgil, Spenser, and Milton* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1981) 69.
- (24) *The Eclogues of Mantuan*, 41-52., *The Bucolicks of Baptist Mantuan*, 41-50. ホフマンは原詩とスペンサーの作品を比較して「けちなパトロンのために困窮する詩人、詩人が靈感を得て詩を書くことのできる英雄の不在、現代にふさわしい詩の様式を見出すことの困難」を共通点にあげている。 Hoffman, 15-21.

- (25) Richard F. Hardin, “The Resolved Debate of Spenser’s ‘October,’” *Modern Philology* 73 (1976) 260.
- (26) Cullen, 45. バージャーも「パリーノードにとって黄金時代は現在にあるが、ピアズにとっては過去のものであり、したがって今は存在しない」と同様の見解を取る。Harry Berger, JR., *Revisionary Play: Studies in the Spenserian Dynamics* (Berkeley: University of California Press, 1988) 299.
- (27) Robert Lane, *Shepherds Devises: Edmund Spenser’s Shepherdes Calendar and the Institutions of Elizabethan Society* (Athens: The University of Georgia Press, 1993) 107-13., Anthea Hume, *Edmund Spenser: Protestant Poet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984) 28.
- (28) *The Eclogues of Mantuan, 72-83., The Bucolicks of Baptist Mantuan, 73-83.* ただしカレンは枠組みこそ借りているものの直接的な影響は少ないと言う。Cullen, 49-51.
- (29) Shore, 44., Cullen, 56., Nelson, 56.
- (30) 「一部教会勢力」をピューリタンとする解釈が少なからず見られるが、マクレインとキングはこれに異議を唱えている。McLane, 154-7., King, 43-4.
- (31) John Dryden, “Preface to Sylvae,” *Poems 1685-1692*, ed. Earl Minor (Berkeley: University of California Press, 1969) 15., John Dryden, “Dedication of the Pastorals,” *The Works of Virgil in English 1697*, eds. William Frost & Vinton A. Dearing (Berkeley: University of California Press, 1987) 6-7.
- (32) Ambrose Philips, *Pastorals, by Mr. Philips* (London: H. Hills, 1710) 2., Alexander Pope, “A Discourse on Pastoral Poetry,” *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, eds. E. Audra and Aubrey Williams (London: Methuen, 1961) 31-2.
- (33) John Gay, *Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 1: 90-2. 詳細は拙稿「ゲイの『羊飼いの一週間』」『駿河台大学論叢』第43号(2011) 37-61を参照。
- (34) John Hughes, “Remarks on the Shepherd’s Calendar, & C.,” *The Works of Spenser*, 6 vols (London: Jacob Tonson, 1715) 1: lix-lxxiv.
- (35) Charles Gildon, *The Complete Art of Poetry*, 2 vols (London: Charles Rivington, 1718) 1: 160-1.
- (36) Samuel Johnson, *The Rambler*, 3 vols (New Haven, Yale University Press, 1969) 1: 203.